

落語に切手を想う

小川 義博

小学生の頃より、上野鈴本に連れられ、切手研時代は大隈講堂で二つ目時代の志ん朝、朝太のきわどい噺をきき、人間の楽しさを感じさせてもらい、落語でどれだけ生活を豊かにさせてもらったか感謝しつつ老いを迎えた。ふり返って、落語と切手という言葉を考えて時、切手を集めてきた頭に浮かぶことがあります。切手収集をなつかしみ、忘れていたことを思い出させてくれる話でお時間、紙面をちょうだいいたします。

初めに、切手という言葉で浮かぶのが「文七元結」という古典落語の噺です。

大店の奉公人が金を盗まれたと大川に身を投げようとしているのを見つけた左官屋長兵衛、娘が吉原に身を預け、つくってくれた50両を与えて命を助ける。翌日、大店の鼈甲問屋の主人がだるま横丁に住む長兵衛へお礼に持参するため、酒屋で「5升の切手をこさえて下さい」という件を志ん生が小学生の耳に残したのが永いこと頭の片隅に宿っていた。



やがて、この切手が郵便切手でなく、商品券の切手であることを偶然、老舗の菓子屋の友人から教わった。通行証としての切手は知っていたが、商品券としての切手は知らないでいた。この商品券としての切手、そばや、菓子屋の切手が一般的で戦前まで、あった様であることを知り、無知を恥じた。

2番目は現在活躍中の柳家小三治の釣にまつわるこっけい噺「野ざらし」。釣道楽から本題に入っていくまくら部分で我々フィラテリストには幼い頃の情景をなつかしく思いださせてくれる切手収集の出発点ともいえる情景を描写、表現している。

え〜しばらくの間お付き合います。この〜よく我々の方では道楽なんてことを申し上げておりますが、近頃はあまり道楽という言葉は使いませんな、なんていうかというど趣

味っていいです。いい言葉ですな。この趣味っていうの、道楽っていうのはどうも。あのやろう道楽者だなんていわれるとなんか面目ないですけど。あの方、趣味人ですななんていうと、急に天皇陛下に会いたくなったりなんかしてこりゃ同じことだろうと思います。いろんな趣味道楽っていうものがあります。

え〜 そうですね 子供の時にだれでも一度はやっただろうという趣味といいますと〜、この〜切手集める趣味なんて〜のは これはたいがい一度はやったことがあるんじゃないかと思えますな。あの切手を集めるのも子供の頃は自分で買うなんて〜わけにはいかないから、おっとつあんのどこにきた手紙だとか、あるいは またオネ〜チャンのどこにきたラブレター〜なんてものを、またラブレター〜なんて〜ものは なんですな なんとか 相手の氣にとりこもうと 思うから なるべく、近頃は使われてないような古くてめずらしい記念切手みたいなのを ベタベタ貼りあわせて まずそこから取り入ろうなんてんで、もっとも、たいがいこういったラブレター〜は成功したタメシはないようですが、そういうのが来るんですな そうつすと、これ オネエチャンのいない間に失敬して台紙ごと切り取ります。おっとつあんの封書も台紙ごと切手を切り取って それからその〜ガラスのコップの中に水を満たして これへ こ〜つけておくんです。水が滲みってくるでえ〜と切手と台紙がだんだん こお〜はがれてきます。早くはがれないかな〜 と無理やりはがすて〜と ベリベリとやぶけちゃう それで 自然とはがれるのをじ〜と待っている。ガラスのコップ越しに見ているうちに小さなあぶくが切手の角のどこにちよいとどまったりする。これを台紙ごと掴んでちよっとゆすってやると ゆすられて あぶくがブクブクと上へのぼってく、ああ〜 早くはがれないかな〜 なんて 待っている。そういうところが まあ〜、一つの楽しみですな。ですから、楽しみというのなんにでもあるんです。なんでも、みんな楽しみになるんです。切手を集めりゃいいってんでなく、そいで、やっどこさ、ガラスの中のコップ あの、その、なんですな コッ

プの中の 早いのはなしが コップの中の切手がはなれてくると いそいそと こいつを つまみ出して ガラス窓のどこへもってって、ペタッと はっつけておく はっつけておきたって、これなかなかむずかしいですな 絵のほうをはっつけておく、のりのほうをはっつけておくと えと こうなるってえと ガラスの窓ごと コップにつけなきゃ～なりませんから
こりゃ～絵のほうをはっつけておく これが 乾くてえ～と、自然に ハラッとをはがれます。はがれた時に ちょうどそこに 居合わせなくて 窓から風がふきこんで その風に乗かって どっかへ飛んでちゃったりなんかして どこまでいったのかな～なんてきがしに歩く、これもひとつの楽しみですな ですから 楽しみって～のは どこにでも あるんです。こいつを え～なんてしよう 乾かしたやつは ボール紙の上にブーブ～紙をはっつけたような、なんていうですか、切手蒐集帳っていうんですかな、ああいうののために 友達に見せ合ったりする。これも一つの楽しみです。

釣の好きという。この釣好きの人・・・
このはなしのいくつかの部分になつかしさを
感じる方が多いと思います。自分もコップに切手をつけて、母から不潔なことと、おこられたことを思い出します。

更に、この柳家小三治が切手収集をまくらに話しているものがありました。女道楽で勘当された若旦那が船頭になり引き起こす噺「船徳」のこれも道楽から本題に入るまくらのところで・・・と 勘当ってことになります。勘当される道楽ですから、こりゃもう おんなの子って相場はきまっています。そのほうがかたちがよろしいですね。勘当された時に おんなの子の方が

”おまえ勘当だっていうじゃない”
”なんで え?” ”これか?” (小指を立てる)
”えっ これ!”
”これだってよ～”
”やったね～”
なんてえなこといいましてね。
これでないといけません。
”勘当だっていうじゃない”
”なんで?”
”切手を集める趣味が高じて・・・”
なんてえのは なんか どうも・・・

柳家小三治落語全集 DVD 第3巻

永らく落語に親しんでいるが高座で切手収集に触れているのはこの小三治師匠しかいないようです。この小三治師匠がおや? もしかすると我々収集癖?を持つ者に近い生活を送ったことがあるのではと、強く思わせた落語会に出くわしました。本年4月に「粗忽長屋」のこれもまくらで、二つ目時代、板垣退助の百円札が百円玉に切り替わる時、北陸のいくつかの町を歩いて百円の札束をやっと4束(4万円)手に入れた。ところが、今となっては少しも苦勞が実らないという愚痴とも反省ともつかぬ話。

このようなことから、小三治師匠は現在はオ～トバイ、はちみつ、お塩等かも知れぬが、若かりし頃、切手収集に熱を上げたのではないかと思います。

もし、小三治師匠に切手収集に熱心な少年時代があったとすると、新宿柏木が住まいであったことから、戸塚スタンプ、原宿のフクオあたりで知らずに顔をあわせていた諸先輩がいたのではとも考えます。

また、落語にのめり込んでいると思わぬ郵便関係の珍事を知りました。

処は大阪阿波座中通り壱丁目に寄留する島根県人菅原という者、郷里の者に大阪朝日新聞を第三種郵便物として五厘切手を貼り送るに際し僅かの郵税を節約しそのしたたみあらわ帯紙の裏へ信書を認め、発覚されては一大事と薄き朱にて交叉の線を引き、こうさへして置けば発覚しても大事はないと両度まで送りしを郵便局にて発見されて告訴の末五月九日大阪地方裁判所に於て重禁鋼二十五日罰金五円監視六ヶ月を言い渡され…:
(『团团珍聞』明治二十九年五月二十三日付)

落語手帳 江國 滋 ちくま文庫

この事件を著者は「ケチの酬いの最高傑作の記事ではなからうか。重禁鋼二十五日、罰金五円、監視六カ月。これが一文惜しみの報酬といふのだから恐れ入った判決である。何よりも、実際に起った出来事である点がたまらなくおかしい。落語の誇張も、現実の面白さの前には、ついに及ばないとぼくは思うのである。」と書いている。この貼られた切手は旧小判ではと考えたりするのも楽しい。これからも、落語的な生活を送りながら、切手をそれとなく気にかけていこうと考えます。



「野ざらし」の噺が聴きたい方は y-ogawa@wine.plala.or.jp まで連絡下さい。